

スロレタリア通信 67

共産主義者同盟

政治局機関紙

反帝統一戦線形成とこれからの段階

の形成を握ったのである。

1945年、開始された1950年代階級闘争の崩
 芽々「NATO・安保粉砕・ベトナム革命勝利」
 の国際主義の勢を堅持するわが同盟の積極的
 活動によって68年10・21国際反戦闘争以降激
 化の階級関係の攻陥として、一月東大学生、日
 大、中大、京大三月闘争として69年の暮を切
 りこぎった。

9月10・21国際反戦闘争に惹き起こる70年野
 保粉砕、政府危機なる社会危機への引き返り
 さぞ見せしめた如く、67年10・8・11・12
 一、二次、オニ次羽田闘争以来安保粉砕と日米親
 善の方向性をもって風吹く反帝派——革命的
 左翼の総体は現実実践過程でマルシヨア国家権
 力総体との対決基軸を構成し、従って同時に階
 級派部の動揺を再統合する基軸的地位を担う任
 務を課せられている。

現在の階級関係の特徴は、67年10・8闘争及
 旧来の権力対社民の階級関係を二変で権力対「
 三派」の攻陥を軸に全階級関係を形成させた局面
 面を更にのりこえた地点に到達した点にある
 。68年8月以降のわが同盟の反帝統一戦線形成
 への呼びかけと努力は国際階級闘争の現状に対
 し、インターナショナルイズムの現実課題、ベト
 ナム反戦闘争の意識的課題として「NATO・
 安保粉砕・ベトナム革命勝利」の戦略的環を提
 起し、なつ国内に於ける反帝統一戦線派の形成
 を通じ、10・21（東大闘争の爆発、権力への
 更なる攻陥をもつて日帝政治委員会佐藤内閣の
 崩壊）の全社会的再編に対する全人民的闘争

の形成を握ったのである。

階級闘争の歴史に於て、1917年、
 ドイツとスペインに於て暴動が起こるに、世界
 資本主義の危機の一面的表現は国内に於ける諸
 階級の尖鋭な対決を招き、その対決は「人民
 戦線」——中産主義の体制維持者対権力という身
 割な形態としてでなく、権力対「人民戦線」中
 産主義、マルシヨア民主主義革命派対「スロレタ
 リア革命派」として表現された。このことは「
 4・17スト」を通じて「京大・京大」に於
 ては鮮明な「反革命」「体制維持の先兵」とし
 て現出したのである。権力との闘争は激化され
 ぼするほど、そしてその先端にわが革命階級が
 位置づけられる程その同盟に立つ旧来の支配的
 諸政党との階級闘争は激化するし、決定的に激
 化させられねばならぬ。彼等社、共も又分解
 と基盤崩壊の巻き返しを始めて自らの存在理由
 を主張し行動するからである。そしてその主張
 と行動は革命的左翼と権力対決関係の進展の
 起点がもたらす。旧状況に対する破壊力に規制
 されて革命的左翼の側の吸引力に対抗し、自己
 の支配する大家に対する統制は反革命への転落
 を軌跡する。

II. 階級闘争の深化と社民の対応

議会主義的風土病患者、秩序派体制内クルボ
 患者社会党、共産党は67年10・8以降切り崩さ
 れた日本階級闘争の地平に恐怖し、なつ68年10
 ・21中権力へ迫る叫びから69年一月東大闘争
 に於ける戦術的學生と反戦青年委員会に結集す
 る青年労働者のエネルギーの発展方向に自己の

を提出したのである。

「6・15問題の解決とは―その経過と問題点」

69年1月18・19日 わが同盟と社会学の最精鋭部隊を中心として二日間にわたり即ち振なれ兵安田解放講堂天守閣争と呼応して即ち振なれた神田カルテ、ラタンバリケード争は、10

・21中央権力争の意識的な東大争を個別学闘争の負から飛躍させ段階で国家権力と直接対決した即ちであった。このような即ちの全人民的争への質的飛躍の戦略的発想の意味を自覚し、神田バリケードをマッセンストライキから地域ソウイェト運動の端緒的形成へと突き進める転換の契機をつかみ実践したならに他ならない。このことは具体的には、オ二期地区反戦運動の終焉として、その最も悪しき形態として現象化したところの「6・15日比谷事件」の解決を我々同盟の下に革命的原則即ち反帝統一戦線の具体化として、70年安保粉碎、70年代階級争をプロレタリアートの権力へ向けて勝ち取るオ一步としての努力に裏付けられたのである。

昨年6・15日比谷事件はオ二期地区反戦運動が階級争の質的到達点に照応しえないものとして、終了を告げるものであった。67年10・8オ一次羽田争以降形成された階級関係の軸が三派對権力の攻防としてあるとするならば市民の統制下からはみ出した三派の即ち部分、解放、革マル連合と中核派が、主体的には組合主義的存在形態を止揚し切れぬまま無防備で市民の

土俵に乗りこんだ時その破綻は明らかだった。

われわれは、七月全学連大会をめぐる諸事件に対するわれわれ自身の主体的な自己批判的総括を通じて、68年8月国際反戦会議の革命的成功を勝ち取る中から「反帝統一戦線」の形成を提起し、同盟八回大会に於て確認された世界階級争の政治的中心環、日米反革命同盟、70年安保争を反帝争の一大焦点として即ち振なれ日本革命への永続的展望を切り開く為にその即ちの負から逆規定―権力との対決をその基準に定め、ソウイェトを展望した反帝統一戦線形成の問題として統一戦線問題を位置付け、そのオ一步を秋の即ちの中で生み出すことを革命的左翼諸潮流に提起した。われわれは「10・8羽田争、ゲバラ、山崎君遺悼一周年」を全国的左翼の統一集会、統一争として勝ち取る為に積極的に働きかけた。以後の経過は10・8・10、21・11、7・11、22・1東大1、15・1、18・19と即ちの質的发展と共同行動の強化を形成、蓄積した事は周知の通りである。その間「6・15事件」の解決処理をめぐる、当面の階級争の質的发展と70年へ向けての革命的組織の任務が基準がおかれるよりも、この事件を通して如何に他党派の解体をはかるか、如何に共利党略を嚆矢として、「セフト」へゲモノをとるか、という酷寒な動きが巻き起こされた。革マルと解放は「地評をまきこんだ運動、プロレタリア本隊と共に」という一点で右翼的野合を深め、運動の発展よりは「打倒中核」という低次元の対立から必然的に、統一行動から右翼として脱落した。しかしこのハネムーンも10・21後の

「反下口、三派排除」岩井発言―地評の動揺―
社民の路線の確定と同時に分解を開始した。解放派は自己の路線の破産（社民の今を利用した政治力学主義と観念左翼としての）をつくり、かつ民同政治を使って窮地を脱し、我が同盟に「6・15解決」の助けを求めて来た。一方、一定の条件の下とはいえ、8・3スロツクを構成したML、オ四、社労衛と6・15以降オ二期地区反戦運動と三派全学連、党派固い込み運動の延長に於て苦境に立たされた中核派はわれわれの提議の下で共同行動の強化と6・15の解決に基本的に結集した。以上のような状況下で二月七日東京地区反戦世話人会が八ヶ月ぶりに再開され「6・15問題の解決と今後の地区反戦運動の強化の為に」という共同声明が発表され、地区反戦、全学連を主軸とする反帝統一戦線形成への巨大な歩みに踏み出すことに成功したのである。

10・8以降、10・21から東大安田講堂死守闘争までの諸過程はわが同盟の階級闘争への洞察力和るロレタリアートの革命的原則、権力へ向けての統一戦線形成に領導されてのみ、このことは可能になったのである。しかしながら、この成功は七〇年安保粉砕、日帝打倒、プロレタリア権力樹立へ向けてのロワイエトを展望した反帝戦線形成運動の前進にとって一つの障害物の除去であり、それは未だ端緒を切り開いた以上には出でない。しかし中核派の自己批判は彼等の一昨年10・8以降の党派固い込み運動、党派利害を優先させた大衆闘争の破壊活動の全ての

総括へとたどりつかざるを得ないし、日本型社民に依拠し展開される組合主義運動と6・15問題を契機に^{表面化}離れした社民との分離はその基本に於て矛盾を提起せざるを得なく、中核派にとって今後政治技術のみでの党派闘争は困難になることは自明である。又、解放派が「6・15」のオ三期実行委員会以降の運営に対して反省したことは当然その前提としての社民との関係をきむ総括へとたどりつかざるを得ない。すでにこの徴候は社青同東京地本再建統一と反安保青年実行委員会、組織形成をめぐって右寄りに再編の動きがあらわれると同時に「6・15」の解決をもちて自らの左翼としての立場を我々と共に進めようとする部分と、左右のキ裂の深さによって表われ始めている。

4. 現段階の課題

われわれは現在、10・21―全国学園闘争の爆発にはつはいつとして登場しつつある全大衆に對し、我が同盟を中心として反帝統一戦線形成を明確に政治的組織的展望として提示しなければならない。それこそ七〇年を向い、向いつつある全大衆に対する革命的党派の緊急な課題である。われわれは全党派を七〇年に向けて再編し、かつ「日帝打倒、NATO、安保粉砕、ベトナム革命勝利」に戦略化された世界革命への日本プロレタリアートの任務を完遂する為に、例之多少の党派利害の損失があつたとしても全力を傾注しなければならないし、6・15問題解決の為の東京地区反戦世話人会の共同声明はそ

半鐘を固く、な故に「反トロ」全学連排除、反戦
 青年委の改組を目論見、つまるところ70年安保
 に対決する多数派形成の新戦術として国民投票
 運動の推進機関として反安保実行委員会を形成
 し、体制内統制の強化にのり出した。一方曰共
 は社共「ソリツテ共闘」を讀み上げ、社共統一
 戦線⇨人民戦線現代版の確立を通して民主連合
 政府の樹立の兎果ぬ夢を社会党と共に議会内勢
 力の拡大に熱中し市民主義派としての体質を鮮
 明にし、東大、京大に示された体制内尖兵とし
 てスルジヨア秩序の防犯者として自ら反革命集
 団であることを鮮明にし、権力との実質的野合
 と遂げつつ全力をあげて帝国主義権力の全社会
 的再編攻撃に対決する青年労働者学生に対し攻
 撃を加えてきている。

このことは社共総体の安保斗争路線の明確化
 (昔から少しも変わらない)と現実的対応(東鉄
 三分割斗争での晩の夕結⇨斗争庄殺と、2、4
 沖繩ゼネストでの対応を示すように)がすぐれ
 て67、68年政治斗争⇨革命的左翼の組織した
 斗争とそのダイナミズムを吸引した戦目的大衆
 の自然発生的反帝派への志向が現実の大家基盤
 に於ける現状打破の志向、生活実態のみならず
 、政治的体制への変革⇨ベトナム反戦斗争に融
 発された自然発生的反帝、反政府斗争への参加
 と支持を通じ、政府危機の端緒⇨権力斗争の崩
 壊を形成したまさにそのことに引きつられた対
 応としてある。とりわけ日帝の侵略、抑圧、反
 革命の総路線に対し実体的反対者として由り板
 く全学連と反戦青年委員会な革命的フロレタリ
 アートの実践的登場を促し、なつ農民、市民の

反帝派スロツクへの接近と参加が、社共総体の
 存在の危機としてありその対応はおきまりの「
 組織統制」の強化として表われ、一方で三六五
 人民戦線方式の機械的描寫による議会主義的統
 一戦線をもつておくれた大衆の現状打破の意欲
 に幻想をふりまき自己保身にマツキとなってい
 るのである。ななる状況のごし示すものは今後
 の階級深部に於ける流動を通じ、激烈な党派内
 争の、ななんすく既成指導部の体制内化、城内
 平和路線に対し反帝統一戦線形成を環として、
 世界革命、フロレタリア解放を叫ぶ、我々との
 全面的開始を意味している。

2. 統一戦線への我々の同盟の基本見解

われわれはななる状況の致米が階級斗争の進
 化なもたらす不可避的なものとして認識し、こ
 当面の行動の一致なら世界革命、日本革命、武
 装蜂起へ接近し、日本階級斗争を領導する国際
 反帝統一戦線の「環」としての反帝統一戦線の
 形成を提起し、その負は「フロレタリア権力の
 獲得へ向けて革命の型としての武装蜂起、中世
 権力斗争と地区ソウイェト、マッセンストライ
 キであり、オニに革命的左派に於ける反帝統一
 戦線⇨革命的左派の団結の負の高度化な社民、
 曰共、労働組合上部機構に対する共同の歩調を
 とる。オニに開始された階級斗争が権力斗争を
 内包することによって、大衆自体斗争への参加
 にあつて戦略——党派を求め、党派を又、大
 衆組織を媒介にして斗争を戦略をなけた斗争へ
 として展開するな故に「軍事」にまで至る党の
 の信頼関係として高める。」われわれの基本見解

すべき作業にとりななることである。それはオ
ーに69年階級闘争の中心環を69年11月日米会談
阻止、佐藤訪米阻止、奥力闘争に置きつつ4月28
日沖繩、米軍政打倒、全面基地撤去闘争、6月
ASPCA東京会議粉砕の呼びかけ、オ二に
全学連、地区反戦運動の統合の組織展望を提示
し、すでに学生戦線では戦線紙上にその方向性
の提起を開始した。その奥体化と共に反帝統一
戦線機関としての「安保粉砕、反帝協議会」の
確立を勝ち取ることである。

5. 各派の統一戦線への態度と現状

過去に於て中核派の諸君は、「社共統一戦線」
「社民と革命的左派の統一戦線」とスターリ
ン主義との関係で打ち立てられるな、ないしは
社民との統一戦線な組織戦術上の問題としての
みうちたてられていた。しかし最近では「革命
的左翼は七〇年に向けて労働運動を闘うために
はまずもって自己の独自の指導系列を具体的な
人間の脈路として労働者の内部に、あらゆる私
場、工場に深々とほりめぐらすこと」と変化せ
しめている。ここには「日本型社民論」「社民と
の革命的統一戦線」の総括もなく、むしろ具体
的職場に於ては「今日の階級闘争に於て民間左
派的組合運動を支え防衛することは階級的任務
」であると断言することを通して、従来の考之
方、方針の唯一の変化は「反戦派」としての自
己を確認したことにあり、「統一戦線」とは形式
的な運営ルールや「統一」にとらわれず、それ

の主張に基いて「行動の分裂」を
の分裂すら許せず、事実をもって主張を確
する」といふ、
革命的左派の統一戦線の形成に於ても変わ
ていないのである。このことは、昨年10・21
際反戦闘争の行動形態の際にも一度確認さ
事をくつなえずという形で示されてきたし、
在進している、全国学園闘争、全兵闘の組織
の進展に対しても「中核全学連」の左派への
抗物としてアレルギーをおこしているのだ。

MJ派の場合は、昨年八月以降表現上のみ
なく、急速に「統一戦線」についての見解を
理し始めている。彼等の理論によれば「ス
の提起した反帝統一戦線の形成と日本階級闘
が強い刺激」と前置きされている。彼等は「
たくさんの矛盾と相異を内に含みつつ安保
綱を戦略課題とする共闘会議の結成」を提起
ながら、「一般的奇合い」ではなく、とくに反
保実行委員会、東京反戦の再開を峻拒する、
の上に立って「闘いの中から、幾度かの共同
動の積み上げに」作られるとし、「われわれの
カ機構として目的意識的に準備されるソウ
ト」を意図している。彼等との関係で「解放
線」「ソウイェト」「統一戦線」としている。彼等
われわれの「反帝統一戦線」に党派「共産主義
者協議会の関係とソウイェトの関係に於て、特
に革命の型」「人民戦争と解放区運動と中兵闘
闘争」↓地区ソウイェト「解放区建設と
論争が強められるだろう。このことは毛澤

團内革命世界戦略（一國社会主義の延長）と我々の世界一國同時革命戦略との論争として。

解放派は後述のように全く党派としての基本的姿勢が定かでない。常に社民と我々の間に遊動する（反安保青年実行委設立での態度と、東地区反戦の再建に彼等は我々との絶縁を恐れながら生息の場を探し求める）と同時に「行動委員会運動の職場、学園での推進こそ市民主義運動を止揚する階級的団結の出来」とし、フロレタリア統一戦線形成への意図を打ち出しながら、フロレタリア統一戦線へ不可欠な「党派」の責任のあり方、党派の共同行動の追求については、全くと言って良い程無責任である。中核の諸君が「解放派の諸君を、まともな党派として一人前に扱ってみたり、裏散霧消してしまっただろう」と言うのも最もなことである。

以上現段階で把握される限りの各党派の「統一戦線形成」への見解からも明らかな如く、われわれの意図する「反統統一戦線」の形成は、わざわざこいものではない。しかしながら、大衆組織のみならず、党派間の組織関係も階級闘争の「対権力関係」「階級闘争の旗」「世界階級闘争の到達点」に規制されるのであり、それは常に「組織の自然発性」を「組織の意識性外世界戦略」による領導を通じて止揚されていくのであり、現状では燎原の炎になった全国的学園闘争、全国の職場、生産界に確立されつつある戦国的青年労働者の組織化、各地にすでに「自衛化し、街頭闘争部隊」としての地区反戦青年委員会の発展等々、69年階級闘争の到達段階

と70年安保粉砕へ向けて大衆的要求は、すでに各党派へ革マル、解放派右派の如く社民的中間主義、観念主義者は除いて）を以て統一行動からの脱落、セフト無い込み運動を根底から批判し許さない状況を作りつつあり、行動の統一と統一戦線の形成を要求している。

6. 統一戦線形成への現状と問題点

われわれはななる大衆的運動基盤の状況と、われわれの統一戦線形成への基本的立場の上に立って、2月7日、16、15号問題の解決」によって東地区反戦の再開を用意したが、尚多くの困難を残している。それは解放派の諸君が謀んでいる「反安保青年実行委員会への東地区反戦の参加」という相も変らぬ社民の傘の下での党派ヘゲモニーの確保という党形成論。また社民加入戦術派の「マ、借り社民」の態度である。解放派の「反安保青年実行委員会」への地区反戦の参加は、その組織構造自体が、社会党青対（高見か？）東地区評青婦協、社青同（協会派と解放派）四首の書記局構成とし、参加は単産加盟、組織加盟とし、加盟基準は社会党、総評の「反トロ、三派全学連排除」組織された暴力否定」と「社民総投票運動による70年安保闘争」にある。とすれば、我々にとって注意すべき態度は明白であり、反戦青年委員会運動が切り崩き、青年労働者の多数の支持と積極的参加を獲ち取りつつある運動の分量、其の拡大強化にあることは自明であり、地区反戦青年委員会を既製の枠内の統制下に組み込めることなく、組織の独立と独自行動の強化を通して市民同

階級闘争の翼を飛躍的に拡大強化し、中央権が印争
— 地域マツピンストを具体化するソヴィエト建設
にある。フロレタリアヘアモニーの為に共に闘い抜
くべくB、KP、青、ML、オ4、社労同の六組織
によって三月五日以降討論を開始し「共闘声明」の
発表が予定されている。我々は予定されたこの共同
声明を一般的政治声明にとごめることなく、七〇年
代階級闘争に立ち向う日本をフロレタリアートの革命
的青年労働者階級の新たな組織体を創出し、JN
ATO、安保粉砕、バトナム革命勝利への政治的翼
に於て全人民的政治闘争への進撃への合図にしなければ
ならない。

社青同解放派に対する、(一)東京反戦世話人会再編
要求(青解一名減)(二)六派「共同声明」要求は、彼
等の組織的混乱状況を見るならば、きわめてきびし
い要求といえる。しかし我々は、この二要求をつき
つけ、彼等にせまじり、もし彼等が三月中旬にこの要求
に応えられない場合は五派でこれらに貫徹し、青解
との訣別を何ら辞さないことを絶対的に確認しなけ
ればならない。

我々の任務とその具体化

以上の統一戦線形成の現在の課題の進行に対し、
その中心の責任を異すべく次の点を確認し、我が同
盟の統一戦線と具体化の活動日程を次に示し全同盟
を統一し、巨額達成に向け集中することを誓請する

記

我々は反戦同盟、S以降自らの任務を完成する、
組織的統一戦線を階級闘争の原則の標榜として、
フロレタリアの「国策主義の再建」を通して活動、浸透す
る日本の革命同盟を領導して来たこの力は、オ一
にわれわれが全同盟の力量を傾注して誓いをしてき
た「世界一階級同時革命世界戦略」に軸を置いた方針
の優位性があり、オ二に防衛庁、レ/18の軍事防衛
征と神前大佐のアドを担い切った我が同盟の社会主
義学生同盟、反戦青年委員会の結果した「中央権力
闘争とマ、ソ、ブトライキ」の突出力である。われ
われは自ら「思想的理論的武器」綱領の討議を直ち
に準備し、この強力の直接的戒厳令的異力の弾圧攻
撃を力に於て準備し、勝利への前進を「4、28沖繩
闘争」で切り開き、政府危機から政治危機へと進化
せしめるべく同ノ部隊の強化と組織化を急がねばな
らない。

- 1) 三月八日 労働部主催春闘決起集会
- 2) 三月十六日 春闘結核大会
- 3) 三月中旬下旬 中教婦粉砕闘争
六派共同声明発表
- 4) 三月下旬—4月上旬
B系地区反戦各地区集会
- 5) BUNDオ二国中央委員会
SSL、反戦全学連大会
- 6) 4月13日 BUND政治集会

共同声明発表前後より反帝統一戦線結成へ向け反主
体的準備と組織強化に重きを置き、以後の党派闘争
に耐え抜く組織体制の確立を計ると共に、我々の力
量を軸にして、四月沖繩闘争を全党派を領導し、学
園、臥場地域に、スト突、闘争委、行動委等を組織
し、10、21、18、19の教訓を生かしてより徹底した
ものとして闘い抜く。

- 7) 五月中旬下旬 オ二国労組活動家集会
- 8) 六月 愛知訪米、ASPA
- 9) 六月十五日 大統一政治集会
- 10) 八月集会「佐藤訪米阻止決起集会」又は
「オ二国国際反戦会議の開催」

11) 月佐藤訪米羽田要力阻止

JNATO、安保粉砕、バトナム革命勝利」汎太
平洋階級闘争の停滞を欧州階級闘争の契機を結合を
かちとることへ69年三月八日フライクで「反NAT
青年会議」が、私丁とR、破りDSを中心として
崩かれ、我が同盟の同類境起り幾ヶ月にしてその
芽が欧州の地で火を吹き上げようとしている。と
くに本年11月に於ける世界反革命同盟の元凶米帝の
心臓部に於ける「反政府打倒闘争」の組織化がしつ
ように要求されるのみならず、我々の為め本年十
月以降の日本に於ける「統一戦線の再建」を遂げた
階級闘争の一端の責任を、我々が本心に職務を担う
BPP、SNを、我々が本心に職務を担う。また、
かつ組織的連帯を、我々が本心に職務を担う。一
ワシントンの「反政府打倒闘争」の組織化を取り、
全東岸「反政府打倒闘争」の組織化を取り、
両帝同主義の「反政府打倒闘争」の組織化を取り、
の一大反戦同盟を、我々が本心に職務を担う。

る種々の社会主義

會で否定してきているのである。この二つは、
口ひめて同盟の形成が階級形成と相対的独立を
可成りその一環として、すなわち、前三者の如く
密着して党を国家に位置するのでなく、口論党
体の畢竟「マルトエ」は国家に位置する。是れら
るという事である。

若者の口は、さうして革命論に基く其の全入
民的政治翼「の武器たる」戦旗」の海外なき規
流」その、同盟が現在「マルトエ」運動の中核」と
位置ついで全刀を挙げてその建設を急いでいる共
黨」に対して、その普遍的性格を保障する重要環
であるといえる。同盟が特に昨年前半集中してき
た「上からの地区党建設」と広範な若者人民が
10、20、30、40の過程で自ら結束しつづめる「
地区反戦・全学連」地域共闘、全只同盟」の結
合を媒介する共黨が、そのめざす所の「まきだ
黨」をなすつるためには、戦旗の環境に於いて創
出された「場」を不可欠とするのである。

いまこそ戦旗を武器たらしめること加へるし
しむければならない。この数回の集会に於いておけ
る前進を促すスピードとこの大量の「マルトエ」も、そ
の二つを産み出すために要している。

オ二期同盟内一律の統一
及び地区での戦旗を
相対的独立化を前提
として、地区反戦・全学連、地域共
闘、全同盟の先進的活動家層との関係と、「部表
りから固定組織化へ」(難読甲田田紙を「二重分崩
」に突進して断る)「東」に於いて可成りなる
「定期集会」へ統合することである、この二
つは同時に、二期運動に現象した地区党運動の手
工業性の克服、共黨層の主体的根拠創出をめぐ
る同盟の革命論的深化の一つの大きな真の形勢
を与えてゆくことである。

マルトエを以て口ひめて、地区反戦、地区共闘生
産の闘争、集會参加の膨大な層を、新編戦旗と
して獲得し、全国政治新編の赤い糸の恒続的担い
手に誘へば、このく物論的前進をかうとする、これ
が三期運動の主要な任務である。

これからの中央権力内争「マルトエ」は、
この二つを口ひけて、マルトエの階級形成を促す

在試者を拡大しているのに対し、一切が議會への一
票に収約される所の、日共の地方自治体内争「ゼネ
スト」という形態がますます階級闘争の先端の戦旗の
上に咲く火花をしかありえないうが故に、日共は汝々
と右翼的戦術戦線を行ってマルジョフ秩序防衛派に
一致することを以てのみ自己の固いマルトエ防衛
し得る。この争奪の下で、赤旗の従来の拡大「スト」
している。

現在の赤旗派者数は、ほとんどが、60年安保闘争
が提出した刃向問題に對して旧日共の之を忘れず前線
した後、この波を人民戦線運動に収約すべく、それ
までの党員拡大先行「方針から」ハタチ大先行方針
の転換を媒介に、「00突撃隊」の同志に続け「
カンパニア」として遂行されていったものである。

だが更にこれに於いて、二つした大衆の自然成長性への
拜脱の産物以外のものでありえないからこそ、この
二年間の階級論的激進の前に減紙傾向は著しく、また
折衝的方針で一歩に増大させた日共版」にしてこそ
果敢な地区の日共戦線者の半数が他黨を政支支持で
あつたこと、日共戦線者であるという統計に與ら
れるように、押し流し、泣きこみ」の反動はいよいよ
露け出された。60年安保直後の「試看会」↓「民青」
↓「日共党員」のルートが流り、放棄されてゆく一方
で、狂気の、正当防衛戦」行使に迫らつたゆえに、他
行では、遂に「V」軍内広告へすかりつくという階
級の本質を露わにしているのである。

オ二期運動の面々頂
以上見てゆく日共の党物種はその革命論全体に連
関する問題であり、この否定即党形成の主体的解消
であるのはなうない。(6)むしろ、60年安保直後全人民
的昂揚に即自的に對して、ハタチ拡大を遂行してい
た時の個々の技術的問題は、さき々々所少ながらぬ
のであり、我々はこれを轉制ロシアの「イスクラ」に
なる現代帝國主義市民社会の全国政治新編の同盟(他
オ三期同盟は戦旗派を武器とする階級活動の出発点
である)と西確しなう。

本戦旗 44号 86号 現代 雑誌 八百円
オ二期同盟 甲田田紙 八百円
本支分 戦旗 週刊 五十日キヤ
本池 戦旗 週刊 五十日キヤ

同盟の階級活動の一環としてこの複面からこの戦旗派
の階級活動の階級、戦旗、戦旗、方針については
三期同盟のこの二つを口ひけて、マルトエの階級形成を促す